1962年版 推理小説年鑑

the mystery annual of japan

1962 推理小説ベスト20

1962年版推理小説年鑑

日本探偵作家クラブ編

vol 2

宝石社

1962年版推理小説ベスト20 Ⅱ
<推理小説年鑑>
昭和37年8月31日発行
編者　渡辺啓助
発行者　稲並昌幸
印刷所　統計印刷工業KK
製本所　石毛製本所
発行所　宝石社
東京都港区　西久保巴町12
電話　431：5294，1906，5997
振替　東京69414
価 350 円
落丁，乱丁本は取換えます

一九六二年推理小説ベスト20　Ⅱ　目次

細すぎた脚 13 飛鳥高
ああ世は夢か 37 鮎川哲也
穴 63 笹沢左保
根の無い話3篇 99 城昌幸
家探し 107 高木彬光
吉凶 119 多岐川恭
隣りの老女 147 戸板康二

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

おえん　171　水上勉
空中観覧車　185　山村正夫
島　199　渡辺啓助
昭和三十六年度作品目録　228　中島河太郎
社団法人日本推理作家協会定款〈草案〉抜萃　288

装釘　小林泰彦

昭和三十六年度推理小説ベスト20

Ⅱ

細すぎた脚

飛鳥高

1

私は早く目を覚ました。雨戸を閉めてない部屋の中に、真夏の日射しが入りこんでいた。しかし、早く目を覚したのは、そのためばかりではなかった。

「早いですね。先生」

私が網戸を開ける音に目を覚された、野村君が言った。

「どうもちょっと気になることがあるのでね」

「なんですか」

「きのう一緒に現場を見て回った時、君が言った、音楽堂の柱が大変繊細で、まるでダンサーの脚のようだと言ったのね」

「――ええ、ええ」

「君は、僕の設計を褒めたつもりなんだろうが、僕はどうもちょっとおかしいという気がして来たんだ。ゆうべ寝ながらね」

「なにがおかしいんですか」

「僕はあんな計算をしなかったような気がするんでね。ちょっと見てこよう。現場事務所の図面もね。僕の計算書とスケッチをもとにして、木島君が図面を引いた筈だ」

「まだ早いから木島君は来てないでしょう」

「しかし、どうも気になるのでね」

私達は、縁側からサンダルをつっかけて庭へ下りた。海岸地特有の砂地である。

野村君や、そのほかの人々が私のことを先生と呼ぶが、私はまだ三十二才である。人々が私をそう呼ぶのは、私が建築家で、錨谷建築研究所という事務所を持って独立して仕事をしているからである。野村君達は、私の部下だ。

ここ数年の間に、私の建築家としての名前は世間に知られて来た。私の設計したいろいろの建物は、沢山の雑誌に紹介されているし、海外の懸賞設計に入賞して、その金で海外旅行もして来た。世間が、私の設計の特徴として認めているのは、その構造的な躍動と斬新さにあるようである。鳥の飛んでいるような体育

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

館、岩を積み重ねたような教会堂、曲りくねった流れのような劇場――。

勿論そのひとつひとつの作品に対しては讃否は相半ばした。しかし、わたしはけなされても大して驚かない。日が経つにつれて、私の名前はともかく人々に印象づけられて行くのだ。

今度の仕事は、鶴沼にある私鉄会社が計画したヘルスセンターである。これは、いわゆる飲食と素人演芸を主にしたヘルスセンターではなく、屋内遊戯場、クラブハウス、音楽堂、プール等を中心にした、もう少し近代的な所を狙った施設である。

私は、この設計に非常な野心を燃やした。基本的な構造計算も自分でやった。部下達がそれを図面化し、工事が始まると、担当した者が、現場に常駐して工事請負人を監督した。それが木島君である。

私は、丁度夏でもあるので現場の附近に部屋を一つ借りて、その前の日に避暑がてら工事の模様を見に来たわけである。

野村君は首をぐらぐら左右に動かしながら歩いていた。

「眠れたかね」

と私は言った。

「よく眠れましたけど、ゆうべ遅く泳いだものだから、なんだか肩が重いですよ」

「昼間、銭湯みたいな所で泳ぐより、僕は静かな夜の海の方が好きだな。海にいるという実感が湧く」

「先生は、泳ぎがうまいですね」

「小さい時からやってたからね」

野村君は、私の大学の五年ばかり後輩で、従順ない話相手である。

現場にはまだ人の姿はなかった。海に近い、背の低い松林を切り開いた中に、建ちかけの建物が分散していた。音楽堂は、丁度コンクリート工事が終った所であった。全体の形は扇状をしており、氷山のように鋭くとがった屋根と、観客席を支える周囲の、野村君がダンサーの脚のようだと評した、下が細く上に向かって躍動的な線を画いている柱の列とが、この建物の主題となっていた。

私は、柱の傍へ寄ってそのコンクリートの肌を手でさわりながら眉をしかめた。

「ここんとこで、三十センチ位だな、径が」
「そうですね」
「こんなに細かったかな」
「図面と違ってるんですか」
「いや、僕は木島君のかいた図面を見てないんだが、誰が見てくれたかな」
「先生が見てなきゃ、誰もチェックしてないでしょう」
「いや、僕の計算書通りになってりゃいいんだが。まあ、ちょっと現場事務所へ寄ってみよう」
私達は歩き出した。現場事務所は、先に工事の進んでいるクラブハウスの一室を使用していた。クラブハウスも完全に仕上っているわけではないが、最初の仮設小屋が工事の邪魔になるし、ちゃんと鍵のかかるクラブハウスの方が都合がよかったのだ。
クラブハウスの南側に石畳の広いテラスがあった。それに面したガラス張りの部屋が、現場事務所になっていた。
「木島君がいるかな。いないと鍵があきませんよ」
野村君が言った。木島君は、忙しい時はクラブハウスの一隅に泊ることもあったが、大体は藤沢に借りたアパートから通っていた。彼がいれば、テラスに面した部屋にいる筈である。
私達は、テラスの方から近寄った。テラスは大体出来上っていたが、まだ、広いテラスにアクセントをつけるために配置する、コンクリート製の椅子ができていなかった。それを作るための型枠用の木材や、出来かけの型枠が、そこいらに置いてあった。
建物のテラスに面した部分は、ドアも壁もガラスである。部屋の中はまる見えであった。数個の机と椅子があり、机の上には書類や図面が置いてある。しかし、私達二人は、殆んど同時に、机の下の床に俯伏している木島君の姿を認めた。

2

「あ、どうしたんだ」
野村君が、ガラスの壁に駆け寄った。私はドアの方へ行った。しかし、ドアには鍵がかかっていた。倒れている木島君の顔のあたりが赤く染まっているのが分る。私の方を見た野村君は、顔を蒼くしていた。

「どうしたんでしょう」
彼は、私の方へ飛んで来て、ドアの握りをがたがた動かした。
「玄関へ回ろう」
私はそう言って、二人はテラスをとび下りて東側へ回った。そこの玄関のドアを野村君が開こうとしたが、やはり無駄だった。出入口はもう一つ北側にもあった。二人はそれらの出入口と、窓とを開けようと試みながら、建物をひと回りしたが、何処もちゃんと中から鍵がかかっていた。
それは無理もないことであった。クラブハウスの中には、工事のためのいろんな資材や器具が、仮に置いてあるし、事務所には若干の現金もあった。附近には海水浴の客が大勢来ているし、近くの飯場には工事に従事している人夫達が泊っている。用心をするに越したことはないのだ。
私達は再びテラスに戻った。
「仕方ない。ガラスを割ろう。そこの棒を取ってくれ」
私は、テラスの向こうに転っている棒切れを指差した。しかし、ガラスの壁の所に、椅子の型枠が立てかけてあった。私は野村君が棒を拾って来るのを待たず、その枠を取ってガラスに突き当てた。ガラスの壁の下の部分が音を立ててくだけた。
私は野村君の持って来た棒を取って、ガラス壁にできた孔のまわりの尖っている所を、更に叩きこわすと、そこから中へ入った。野村君も私に続いた。
木島君が死んでいることは、ひと眼見て明らかであった。顔を横にして床に俯伏せていたが、その横顔から頭が真赤に血に濡れ、そのあたりの床にも、むごたらしく血が飛び、流れていた。彼が腰を下していたらしい椅子はその横に倒れていた。
私は机の上の電話に手を延ばした。警察の電話番号は、消防署や病院のそれと共に、壁に貼り出してあった。
警察の連中は間もなくやって来た。私は覚悟をして彼等を迎えた。仕事に出て来た職人達や、噂を聞いてやって来た海水浴客や附近の人達が、クラブハウスを遠巻きにした。
警察官達は、クラブハウスの内外で活動を始めた。私達が事情を聴取されたのは勿論である。

木島君は、野村君と同窓生で、二十八才の独身。丁度仕事に面白味の出て来た頃で、今度の仕事を主に担当し、なかなか人に遠慮をせずに思ったことを精力的にやってのける男であった。私の所としては、得がたい有能な建築家であった。

警察の調べによると、木島君は昨夜の九時か十時頃に殺されたもので、死因は頭蓋骨骨折であった。骨折というより粉砕というところらしい。なにか硬い、例えばハンマーのようなもので、頭の右側から後にかけて乱打されたものであった。その時、彼は机に向かって腰かけていたようで、机の上に血が飛び散っていた。

室内は椅子が倒れているほか、大して乱されてはいなかった。工事現場の事務所のことだから、もともとそんなに整頓されてはいなかったのである。兇器らしいものは部屋は勿論、クラブハウスの中には発見されなかった。しかし無くなっているものがあった。それは小さな手さげ金庫である。

設計者の事務所では、あまり現金は必要としない。しかし工事請負人の方は多少の現金を持っていなければならない。請負人の事務所は別の所にあったが、ろくに鍵もかからないちゃちなものだったので、必要でない時、金庫を鍵のかかる私達の事務所においたのである。中には、領収書や伝票のほかに、三万円ばかりの現金があった。

この手さげ金庫は、その日の内に附近の松林の中で発見された。こじ開けられて現金はなくなっていた。

この金庫は勿論、クラブハウスの内外で指紋の検査が行なわれたが、仕事の関係者以外のものは発見されなかった。

もうひとつ真に不都合な事実があった。それは最初私達が気づいたことであるが、このクラブハウスに出入りできる口は、何処も内側から鍵がかかっていたのである。つまり密室である。しかしそれを解くひとつの鍵があった。

建物にドアがつくと、その鍵は現場事務所で保管して、建物を引き渡すとき一緒に建築主に渡すのである。各ドアの鍵は二つづつあったが、それらは勿論全て、木島君の死んでいた部屋の戸棚に、箱に入れてしまってあった。ところが、玄関の鍵の一つだけがそこにはなかった。それは非常用に、請負の事務所の方に

置いてあったのだ。
警察では勿論その鍵に注意を向けた。この事件で、主動的役割をしたのは県警察の矢原警部補であったが、彼はその話を聞くと自ら請負人の事務所へ飛んで行った。
「クラブハウスの鍵は何処にある」
陽に焼けた面長の大きい顔に、やはり人一倍大きい目玉をぎょろつかせて尋ねた。請負の現場主任は、四十ばかりの小男であった。
彼はすっかり恐縮していた。
「実は失くしたんです」
「失くした？　いつ？」
「いつもここに置いてたんですけれど、二、三日前、ちょっと用があってあそこを開けましてね、そのままポケットに入れて帰ったんです。そして悪いことに藤沢で飲みまして、そんときどっかで無くしたらしいんです。翌日気がついたらないんです」
「それを木島さんの方へ言ってあったの？」
「それが、つい忙しいものですから、まだ言ってなかったんです」
「おかしいな。二、三日前って、それいつ？」
金子という主任は、根掘り葉掘り尋ねられたが、鍵をなくしたのは事実のようであった。しかし何処でなくしたかは遂に分らなかった。こういうことは、私は勿論あとで聞いたのである。

3

不愉快な思いをしたのは、金子だけではなかった。私と野村君も、矢原の執拗で無遠慮な質問を何度も受けなければならなかった。
彼は、私達が中に入ってから方々鍵をかけて密室にしたのじゃないかということすら、一応疑って見ていたようである。しかしわれわれがそんなことをするどんな必要があるのかは、彼も説明できなかった。
「木島さんと野村さんとは、どういう関係ですか」
矢原は、私を一人にしてそんな質問をした。
「仲のいい友人同士です」
「何か二人の間にありませんか。異性関係とか、仕事の上の嫉妬とか――」
「つまり、野村君が犯人だというのですか」

私はつとめて冷静に聞き返した。
「そういうわけではありませんがね。一応そういうことを伺っておきませんとね。一見仲のいい友達同士の中に、えてしてそういうことがあるものですからね」
矢原の大きい顔は、瓦のように無表情であった。
「私はなにも聞いておりません」
「そうですか」
彼はゆっくりタバコをふかしながら、質問を簡単にはなかなか切り上げないのであった。
私は彼が、野村君のことを調べているのか、それともそうすることで私の挙動を観察しているのか、はなはだ疑いを持った。
丁度、クラブハウスの中の別の部屋で、現場の机を横に置いて私達は坐っていたが、矢原は、その机の上を指でこすっていた。薄く積った砂埃の上に、指の跡がついていた。
「こんなに、きっちりした建物でも、やっぱり、砂埃は入るんですな」
矢原はのんきそうに言った。
「今、日照りで砂が干き切ってますからね。細かい砂はなかなか防げませんね」
私はそのことを自分の責任のように感じながら、弁解がましく言った。
「あの部屋の床にも、だいぶ砂が入っていた」
「丁度南向きで、それに昨夜は、だいぶ風が吹いていた」
「そうですか」
矢原は、珍しいことでも聞いたように、改まった声でそう言った。そして続けて尋ねた。
「どうしてご存じなんです」
「夜、海へ出てましたのでね」
「何時頃？」
「九時から十時頃でしたよ。野村君と二人で泳いだのです」
「あなたは、野村さんのあとからだいぶ遅れていらしたそうですね」
私は、矢原が野村を先に調べたらしいことを知った。
「そうです。実は出がけに急に便意を催しましてね。あとで行ったのですが、すぐに海岸で野村に会わず、しばらく泳いでから見つけたんですよ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com